

# イネカメムシの越冬状況を確認しました！

[水稲における被害を防止するため適期防除の徹底に努めましょう]

イネカメムシは斑点米カメムシ類の一種で、稲の出穂期頃の加害で不稔を、乳熟期頃の加害で斑点米を生じさせる被害の大きな害虫です。今後の発生を予測するため、令和8(2026)年2月に県内全域で越冬状況調査を実施しました(写真1、2)。

## 発生状況

- 県全体では、昨年と比較し、やや少なかった(図1、2)。
- 地域別では、県南部から中部、東部の9市町で確認された(図3)。昨年と比較し、県南部では昨年よりやや少なかった一方、県中部では多かった(図1、2)。

## 発生予測と防除対策

- 越冬が確認された地域(図3:赤色■)では、今後の稲への被害が懸念されます。被害防止のため、出穂期頃と、その7~10日後(乳熟期頃)の2回、液剤等による防除を必ず実施しましょう。
- 越冬が確認されなかった地域(図3:黄色■及び白色□の市町)においても発生が懸念されます。常発地の県南部では引き続き適期防除を実施し、それ以外の地域においても、定期的にはほ場を確認し、早期発見・適期防除に努めましょう。

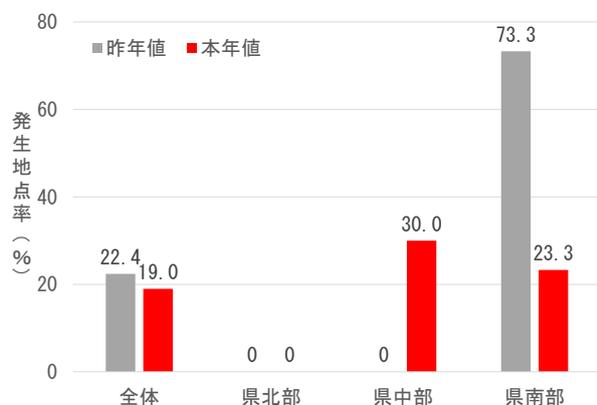


図1 発生地点率(%)

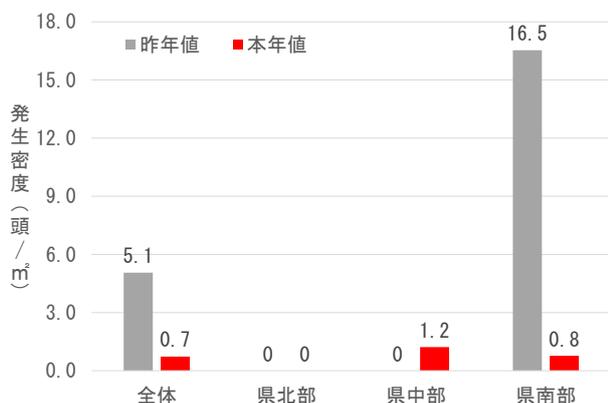


図2 発生密度(頭/㎡)※

※ 1地点あたり1㎡(一部3㎡)の落葉+表層土壌数cmの生存個体数/㎡を計数

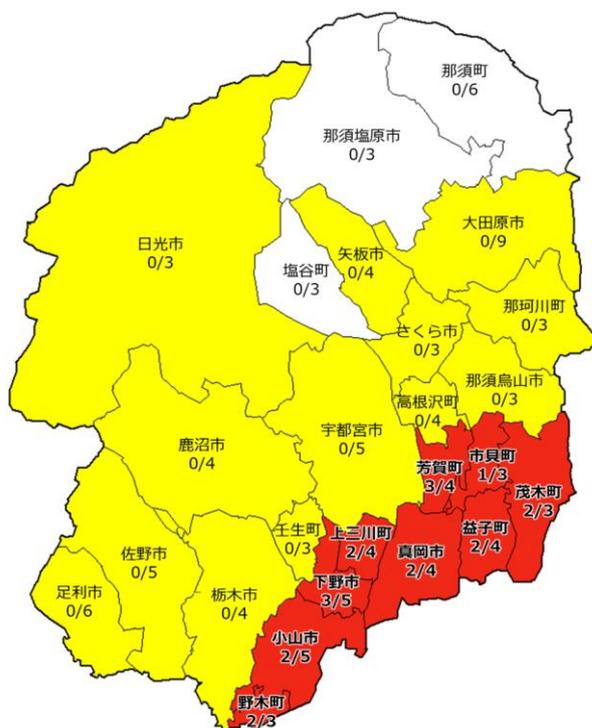


図3 越冬確認状況

■: 越冬が確認された市町  
 ■: 越冬は確認されなかったが、前年の水稲ほ場等で発生を確認した市町  
 ※ 図中の数字は、越冬確認地点数/調査地点数 25市町 102地点調査

## 具体的な防除方法

- 1 不稔防止対策として出穂期頃（1回目防除）と、斑点米防止対策として出穂期の7～10日後（乳熟初期頃）（2回目防除）に液剤等を散布して防除する（表1）。  
その後、ほ場内で本種を含む斑点米カメムシ類が確認された場合は、斑点米防止のため、7～10日間隔で1～2回追加防除する。
- 2 各地域の防除組織と連携した地域一斉防除や、サービス事業者や個人によるドローン等を活用した薬剤散布を組み合わせることで、適期防除を実施する。併せて、発生予察情報を参考に、防除の準備を早めに行う。
- 3 イネカメムシは他県において薬剤抵抗性の発達が確認されているため、同一IRACコードの薬剤は連用を避け、異なるIRACコードの薬剤を組み合わせたローテーション散布を実施する。

表1 稲のカメムシ類に登録のある主な薬剤（令和8（2026）年3月4日現在）

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期	本剤の 使用回数	成分	農薬の系統	IRAC コード
スミチオン 乳剤	1000倍	収穫21日 前まで	2回以内	MEP	有機リン系	1B
キラップ フロアブル	1000～ 2000倍	収穫14日 前まで	2回以内	エチプロール	フェニルピ ラゾール	2B
キラップ 粒剤	3kg/10a		1回			
トレボン EW	1000倍	収穫14日 前まで	3回以内	エトフェンブ ロックス	ピレスロイ ド	3A
スタークル 液剤10	1000倍	収穫7日 前まで	3回以内	ジノテフラン	ネオニコチ ノイド	4A
ダントツ 水溶剤	4000倍	収穫7日 前まで	3回以内	クロチアニジ ン		
エクシード フロアブル	2000倍	収穫7日 前まで	3回以内	スルホキサフ ロール	スルホキシ イミン	4C

注1：IRACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

注2：斑点米カメムシ類の薬剤防除は、水田周辺のミツバチに影響を及ぼす可能性があるため、地域の養蜂家へ薬剤防除日を事前に周知する等の積極的な対応を行う。



写真1 成虫越冬の様子（左：落葉下、右：ジャノヒゲ内※） 写真2 越冬場所の例（雑木林）  
※ 成虫は落葉下やジャノヒゲ内等で越冬する

詳細は、農業総合研究センター（TEL 028-665-1244）までお問合せ下さい。  
病害虫情報発表のお知らせは「[農政部X](#)」、[栃木県農業総合研究センターホームページ](#)でも  
ご覧いただけます。また、[カメムシ防除作戦ホームページ](#)も御確認ください。

農総研HP



カメムシ防除作戦HP

